# エロいアイツも生きている

ウリミッツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エロいアイツも生きている

【Ｎコード】
Ｎ３０３４Ｉ

【作者名】
ウリミッツ

【あらすじ】
母を亡くした少女が「生きていこう」と思えるまで。

あれからもう三ヶ月も経つのに、ずっと涙が出ない。私ってこんなに薄情な人間だったんだね。ごめんね、お母さん。

ぶ厚い雲に覆われた空に向かって、私はつぶやく。

「私、もう死んじゃってもいいかな？　ねぇ、お母さん。私も、そっちに行っていい？」

潰れたばかりの山奥の廃病院。その非常階段の三階で、私はまた空を眺めている。周りには夏と秋の境目の、紅葉とまではいかない緑色の山があり、病院の下には私が通っている中学へと続く道路がある。

学校からまっすぐ家に帰ってもどうせ誰もいない。今日もお父さんが帰ってくるのはきっと夜中だろう。お母さんの思い出ばかりが繰り返しリピートされる家に、独りでいるのは辛い。

いっそのこと、もう・・・・・死んじゃってもいいよね。

私は非常階段の柱につかまりながら手すりの上に立った。着ている制服のスカートとショートにしたばかりの髪が、風で靡く。

突然、

「おい、危ねーぞ！」

「ひゃっ」

私は背後からの男の声に驚いて落ちそうになった。

「うわ、ったく、何やってんだよ」

その男は私の腰を両手でつかんで支えた。男は及川ナツキ、同級生だ。

「だ、大丈夫よ！　あっぶないわねー。急に驚かすんじゃないわよ！」

後ろ向きな気持ちは一瞬で隠れ、イッキにいつもの日常に引き戻された。

この男、及川ナツキは金髪サラヘアのエロバカ野郎なのだけど、なぜか学校では人気がある。
私が柱にしがみつきながらゆっくり降りると、ナツキの両手は（それがまるで自然かのように）、私の腰から脇の下へと移動した。ナツキの背が私よりだいぶ高いせいもあって、自然と両腕を広げる格好になる。これじゃまるで小さい子がされる「たかいたかーい」だ。
私はナツキを見上げながら、
「あの・・・・もう下にちゃんと降りてるんですけど」
ナツキは手を脇の下から胸のほうにゆっくりずらして、
「ん？　ああ・・・いや。なんか、これっていいなーって思って」
ぱふぱふ。
こ、こいつ！　なんか揉んでませんか？！
「こ・・・のぉ！　早く離しやがれエロヤロー！」
私はナツキの顔を両手で挟むように思いっきり叩いた。
ばちーん！
「痛ってぇなぁ。あいかわらずオマエって手出すの早えよな」
私は胸を両腕で隠して、
「アンタがエロいからでしょ？！　エロナツキ！」
「オマエが危ないことしてっから助けにきてやったんじゃねぇか」
「アンタが来たから危ないことになったの！　一人だったら全然危なくなんてないの！」
なんてのは真っ赤な嘘だけど。
「てゆっか、呼ばれたから来たんだけどさぁー」
言いながら金髪は視線をそらす。
「私は呼んでません」
「ちげーよ。その、なんだ？　・・・・オマエの母さんにさ」
「え？」
私のお母さんは三ヶ月前にこの病院で死んだ。病院が潰れたのはそのすぐ後のことだ。お母さんはきっと、この病院で死んだ最後の

人だろう。ナツキだってそのことは知っている。いくらなんでも、この冗談は笑えない。
「ちょっと、こっち来なさいよ」
私は乱暴にナツキの手をつかんで病院の中に入った。
前からデリカシーのないやつとは思ってたけど、こんなこと言うなんて。信じらんない！
この三階にはお母さんの部屋がある。数ヶ月間、病気と闘い続けた場所だ。どういうわけか潰れた後、この病院は引き上げる最低限の物だけが引き上げられてあとはホッタラカシにされていた。
私は『お母さんの部屋』にナツキを連れてきた。
「アンタだって見舞いにきたでしょ？　ここ」
「ああ・・・」
無機質な白いベッドと、着替えやタオルを入れるための小さな棚。その上には映らないテレビ。
ベッドの向こうの窓を開けると、薄黄色いカーテンが風で決まり事のように揺れた。
振り向いたら、ナツキは『お母さんのベッド』に腰掛けていた。
「ちょっと、そこすわっちゃダメ！　お母さんの場所なんだから！」
「ん？　そっか」
私は背もたれのない丸イスをナツキに渡す。ナツキは素直に立ち上がり丸イスに座ってベッドを背もたれにした。もう一つ丸イスを持ってきて、私もベッドを背にしてその隣に座る。
「そういえば、アンタのお母さんて・・・・」
「小学三年のときに死んだ。原チャで事故って」
私とナツキは小学生の頃からたびたび同じクラスになっていた。あの頃からナツキは『エロナツキ』と呼ばれていたような気がする。
「あの頃、オレの母さんが死んだってのがクラスのやつらに知られてからさ、みんな変に余所余所(よそよそ)しくなってな。それがムカついて騒ぎばかり起こしてたら、いつの間にか『エロナツキ』って呼ばれてた」

「騒ぎっていうか・・・。アンタ女子のスカートめくってばっかだったじゃん」
ナツキはなんだか楽しそうに、
「そうそう。別にパンツなんか見たくなかったんだけどさ、めくると女子が悲鳴あげてスゲー騒ぎになるじゃん？　あれがおもしろくってさ！」
「最低。アンタ、ほんっとサイテー」
ナツキは「えへへっ」と笑いデカイ態度で足を組んだ。褒めてないっつーの。
「男子受けはかなり良かったぜ？　おかげでみんなも前みたいにクダけてくれてさ、また学校が楽しくなった」
「なんか、間違ってる気がするんですけど・・・」
「でもまぁ、スカートめくりも鮎川に脱がされるまでだったけどな」
「へ？　あ、ああ、そうね。悪い子にはバツを与えないとね！」
いま思い出すと、ちょっと恥ずかしい。

あの頃私たちの三年二組は、及川ナツキのスカートめくりのせいで女子と男子が対立状態になっていた。男子チームのリーダーがナツキ、女子チームのリーダーがなぜか私、鮎川コトミだった。
私たち女子はナツキ一人のせいでかわいいスカートを穿けなくなったり、毎日の洋服選びに苦労させられていた。その恨みが積もりに積もって、ある日、皆で相談しついに反撃に出た。
クラスの女子の半分以上が参加してナツキのジーンズを脱がしにかかったのだ。ナツキは十数人の女子に囲まれ、押し倒され、ベルトを外され、あともう少しで脱がせられるというところで、先生がやってきた。あのときの女子チームの団結力はすばらしかったのだけど・・・。先生に怒られてほとんどの女子が戦列から離れていった。
なぜかリーダーに祀り上げられていた私は責任を感じて、その日以降、一人でナツキに立ち向かった。そしてついに、ナツキがジー

ンズを穿いてないとき、体育の時間が終わってジャージ姿でわいわい廊下を歩いているときに、私はそれを実行したのだ。
そろりそろりと後ろに近づき、ナツキの腰に両手をかける！
思い切って引き下ろした私が見たのは、ナツキのプリンとした生(なま)のお尻だった。いきおいあまってズボンではなくパンツまで脱がせてしまったのだ。
脱がした本人の私が「フワニャァァー！」と声にならない悲鳴を上げてその場から逃げると、その声を聞いてナツキを見た女子がまた「キャーッ！」と悲鳴を上げて逃げていく。悲鳴が悲鳴を呼び、それまでにナツキが起こしたどの騒ぎよりも大きい騒ぎになった。
その騒動のあと担任の先生からお母さんに連絡が入って、お母さんが、
「そんなに仲がいいんだったら、一度うちに遊びに来てもらいましょ」
と言ったから、それはもうひどく面倒なことになった。
先生からの命令でナツキと私は二人で遊ぶことになったのだ。こともあろうにコイツと、私の自宅で。
でもナツキが家に来たときは、お母さんの要望でお母さんを含めた三人で遊ぶことになった。テレビゲームで盛り上がったり、お母さんが作ったバケツプリンをお腹いっぱいに食べたり。
ナツキは私の家に来たときも、いつもの横柄な態度を変えなかった。お母さんはそれがかなり気に入ったらしく、それから何度も家に呼んだ。私としてはトンだ迷惑だ。でも、まぁ・・・・今思い出すと、結構楽しかったかな。

「アレはマイッタ。正直、マイッタ」
「もう何度も言ってるけど、アンタがいけないんだからね、アレは」
アレとはパンツ脱がし事件のことだ。
思い出しながら私たちはクスクス笑う。私はだんだんおかしくなって、声に出して笑った。

「あははっ。あー、もう。あの頃って、なんだかんだ言っても楽しかったよね？」
ナツキは一瞬真顔になって、でもすぐに微笑んで、
「ん、まぁ、な。・・・・オマエの友達も、態度、変わっちゃってない？」
「あ・・・・」
ナツキのスカートめくりは余所余所しくなった友達にムカついて始めたことだった。
私の友達は・・・・。うん、すごく気を使ってくれてる。毎日、話す言葉一つ一つに気をつけて、私を傷つけないように、本当に気をつけてくれてる。だけど、それが余計に寂しい。やさしさが痛い。だから・・・。
「学校、つまらなくなってねーか？」
「え？　あ、まぁ、いろいろと、ね。あるけど、ね」
そんなことないって、言わなくちゃ。全然変わってないって。
「あの、うん、・・・・全然、だよ。全然、変わってないよ。みんな、やさしいし」
言えた。
「オマエ、嘘つくの下手。泣きそうな顔して言っても説得力ない」
このバカに言われるなんて。私はナツキと反対方向に顔をそらす。
「そ、それより何よ！　アンタこそお母さんに呼ばれたなんて嘘ついて、ほんっとサイテーね！」
「あー、なんだ。信じてねーのか」
「あったりまえでしょ！　バカじゃないの？！」
ナツキはムスっとして、
「おーい！　コイツ信じてねーぞ！　どうすんの？」
大声で言った。
その不思議な言動に驚いてナツキを見る。ナツキはベッドに寄りかかり何もない斜め上に向かって叫んでいた。そして、
「ん。・・・枕の下？」

そう言ってナツキがベッドの上の枕(まくら)を無造作に退(ど)けると、一枚の写真がそこにあった。
「ほい。見ろってさ」
その写真はお母さんがここに入院したばかりのときに、この病室で撮ったものだった。「病室で記念撮影なんて縁起でもない」とお父さんは反対したけど、お母さんは引かなかった。
まだ艶のあるキレイな髪のお母さんと私が、笑顔でブイサインをしている。その後ろにはどんな顔をしたものか、と悩んでる感じのお父さんが写ってる。そんな写真。
懐かしいな・・・・。
お母さんはいつも笑顔だった。この後、副作用で髪がパサパサになって、どんどん抜けていっても。もうほとんど髪がなくなって、坊主頭みたいになって、体が痩せて頬がこけてきても。
変わっていくお母さんの姿を見て、お見舞いに来る人たちの中には涙ぐむ人もいた。必至に涙をこらえている人もいた。その人たちは何故かお母さんに「ごめんなさい」と謝ったりしたけど、お母さんはいつも微笑んでいた。それは「助かる見込みがない」と分かってからも同じだった。
いつだって、一番つらいのはお母さん自身だったはずなのに。お母さんは私にまで笑顔を向けていた。
どうしてなの？　お母さん・・・・。
ふいにナツキが「写真の、裏」とだけ言った。
言われたとおりに見たそこには、黒いマジックで、キレイなお母さんの字で、力強くこう書かれていた。

『笑って、生きていこう』

パタッ、ポタッ。
写真の裏にしずくが落ちていく。
あれ？　・・・・私、泣いてるの？

お母さんが死んでからの三ヶ月間、一滴も流れなかった涙が、次から次へと溢(あふ)れて頬を伝わっていく。
「あっ・・・んあ、あぁ・・・んぁあっ、・・あああ！」
こみ上げてくる感情が、悲しみが、涙になって次から次へと溢(あふ)れた。
私の隣でナツキが、
「悲しいのに泣けないのって、辛かったろ」
つぶやくように言った。
「お、・・・おかあさんの声、ん、・・ナツキ、・・・・聞こえるの？」
ナツキは黙ったまま何も言わずに、制服のポケットからクシャクシャのハンカチを出して私に渡した。
「なんで？　なんで私には聞こえないの？　ん、・・あぁ、ん・・おかあさん・・・。お・・・が・・あさ・・ん、・・・おかあさん！」
まるで、迷子が泣きながら母親を求めるように・・・。
私は立ち上がり、姿も見えない、声も聞こえないお母さんを呼んだ。何度も、何度も、宙に向かって。
「ひっ、ん・・・おが・・あ・・・さん！・・・ひっく、ひっ、おがあ・・・さ・・・ん！」
私にお母さんの声は聞こえない。それでも泣きながら呼び続けた。
おかあさん、おかあさん、おかあさん・・・・・・・。
三ヶ月間毎日、誰もいない家に帰って、毎日、思い出の中で暮らしてきた。お母さんといっしょに過ごした時間が、家に残るお母さんの温もりが、私の心の中にいつの間にか悲しみとなって降り積もっていた。
もう、限界だったんだ。
心に積もった悲しみが、寂しさが、私の心をマヒさせていたんだ。
死んでもいいよね、なんて。そっちに行ってもいい？　なんて。
きっとナツキがここに来たのは、そんな私を助けるためにお母さ

んが呼んだからなんだろう。
私に、生きてほしいから。
「ひっ、ひっく、・・・ん、・・ひっ、・・・・」
ずいぶん長く泣いて泣き疲れて、私は丸イスに座りナツキのクシャクシャのハンカチで鼻をかんだ。
ちーん！
「うわ、オマエ！　ったく・・・・。それちゃんと洗って返せよな！」
もう一度、ちーん！
「あははっ。泣いたよ、泣いた。私、思いっきり泣いた。泣いたらなんか、・・・スッキリした！」
ナツキはポンポンっと私の頭を軽く叩いた。もしかして、頭を撫でてるつもり？
「んもう、子供扱いすんな、エロナツキ」
「エロは関係ねーだろ、エロは」
ちょっと照れたふうに拗(す)ねてから、ナツキは微笑んだ。

お母さん、私、生きていくよ。コイツだって、このどうしようもないナツキだって生きてるんだもん。
「あははっ」
お母さんの喜ぶ声が聞こえたような気がした。
うん、そうだ、そうだよね？　お母さん。
笑って、生きていこう。

窓から入ってきた風がやさしくカーテンを揺らす。
外を見ると、ぶ厚い雲の切れ間から幾(いく)すじもの光が差して、美しく山々を照らしていた。
「ナツキ、ほら、」
私とナツキの目の前で、スズメたちが「チチチッ」と楽しげにジャレ合いながら、雲間の光あふれる空へと飛んでいった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3034i/

---

エロいアイツも生きている

2010年10月8日15時14分発行